



一般社団法人

全国高等学校PTA連合会

一般社団法人全国高等学校PTA連合会

(連絡先) 〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町2-1 (奥田ビル) TEL03-5835-5711 FAX03-5835-5757
発行人 相川順子 URL <http://www.zenkoupren.org/> eメール info@zenkoupren.org

会報

No.74

「和をもつて響き合え！ つれもて広げる共育の輪」をテーマに、昨年から続く未曾有の災

害に直面し再認識された人ひととの「つながり」の大切さを軸に討議されました。



第62回全国高等学校PTA連合会大会

和歌山大会

和をもつて響き合え！

～つれもて広げる共育の輪～

第62回全国高等学校PTA連合会大会和歌山大会が「癒しの国」和歌山で、全国から1万人を超える会員及び関係者の皆様が参加し、8月22日・

23日・24日に開催されました。



別第1分科会で

和歌山市、田辺市の6会場に分かれ、研究・討議が行われました。

大会2日目は、

「チームワーク(和)の力」の熱いメッセージをいただきました。

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「チームワーク(和)の力」の熱いメッセージをいただきました。

午後からは、基調講演があり、宇宙航空研究開発機構の川口淳一郎氏から「『はやぶさ』が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」

「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」と題して、「あきらめない心」



「心に残る素晴らしい大会であった」との言葉をいただき、盛会に終わりましたことに改めて心より感謝申し上げます。

は、関西大学の河田恵昭氏から「自助・共助を育む防災教育」、特別第2分科会では、和歌山大学の堀内秀雄氏から「熟議子どもも大人も、共に育ち、育て合うPTA活動」について、和歌山大会ならではの特色ある演題でそれぞれ熱心な討議が行なわれました。

全国大会 和歌山大会

会長あいさつ・実行委員長あいさつ

文部科学省祝辞

分科会報告

大会宣言

シリーズ青春白書 全国からの便り一輝く姿がここにあるー北海道立札幌篠路高等学校

1頁

2頁

3頁

4～6頁

7頁

今号の主な内容

校訓「創造 開拓 希望」良き伝統と文化を新たな学校へ 神奈川県立大和東高等学校

「人としての感性を磨く“和”の学校」

～人の“和”を広げる活動に取り組む～

会長・事務局長研修会報告・常置委員会報告

シリーズ視点・新企画

世界に羽ばたけ！輝く高校生！

8頁

9頁

10頁

11・12頁

式

辞

一般社団法人全国高等学校
PTA連合会 会長

相川 順子



全国高等学校PTA連合会は、本年4月1日に一般社団法人として新たなスタートを切り、第62回全国高等学校PTA連合会大会和歌山大会は、記念すべき第1回大会となります。

本大会は、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に象徴される紀の国和歌山市と田辺市を会場に、全国各地から一万人を超える会員が集いました。

本日は、文部科学省より合田生涯学習政策局長様、和歌山県より副知事下博様をはじめたくさんのご来賓の皆さまをお迎えし盛大に開催されますことに、心より厚く御礼申し上げます。

めざして準備をして参りました。

昨年3月に発生した東日本大震災について皆様から多くの支援があるものの復旧、復興が長期にわたる見通しで、全国高P連では6月23日の総会において引き続き義援金活動をしていくことを決定いたしました。

また昨年は、紀伊半島を襲った台風による豪雨災害などで甚大な被害がありました。今年も異常気象ともいえる集中豪雨や竜巻による被害が全国各地において発生しており、被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。私たちは、自然災害の恐ろしさを痛感しながらも、地域の「つながり」や人とひとの「絆」の大切さを再認識いたしました。そしてそこから立ち上がっていかねばなりません。

「絆」といえば今年の夏は4年に一度のオリンピックピックが開催され私たち

に多くの感動を与えてくれました。選手たちの言葉の中に、「たくさんひととに支えられてきた」という感謝の言葉が多く、親子や仲間や人とひとの「絆」の大切さを口々にしていたのが印象的でした。そして、中には、被災地の子どもたちとメダルを取ることを約束して頑張った選手たちもあります。スポーツを通してそれぞれが自分のスタイルで被災地の人たちを勇気づけてくれたと思います。

本大会においても私たちは前に進むために今PTA活動を通して何をしなければいけないのか、地域コミュニティとしてPTA活動が果たす役割を真剣に考えることが大切ではないかと思えます。

全国高P連は、これまでの高校生の健全育成にかかる活動を柱に、各種事業を行ってまいりましたが、予想以上のスピードで情報化が進み、グローバル化によるさまざま

な課題も見えてきました。高校生の抱える課題は、私たち保護者の抱える課題でもあります。高校生が多様化した現在を生き抜く力を身に付けるためにPTAは再々の支援をしていかなければなりません。私たち保護者が正しい情報を共有していくことで学校を支援し、地域社会とともに高校生を育てることにより、子どもも地域もともに成長し地域の活力になつていくのではないかと思います。このようにして保護者が集い、学び、大きな一つの輪になることが重要です。

全国高P連は、子どもたちのためにという情熱と想いを受け継ぎ、さらに一般社団法人として皆さまのご協力によってより充実した事業活動をしていきたいと思えますので、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、永年PTA活動にご尽力され、本日受賞されます皆さまの功績に敬意を表しますとともに、今後ともご支援くださいますようお願い申し上げます。

和歌山大会開会宣言

第六十二回全国高等学校
PTA連合会大会
和歌山大会実行委員長

西原 英男



全国高等学校PTA連合会会員の皆様、「魂の癒しの地」和歌山へようこそおいでくださいました。和歌山大会実行委員ならびにスタッフ全員で熱烈に歓迎いたします。

今回の和歌山大会では、「和をもって響き合え！ つれもて広げる共育の輪」をテーマに「つながり」を大切にした大会を目指しています。

基調講演は、宇宙航空研究開発機構の川口淳一郎教授をお招きし「『はやぶさ』が挑んだ人類初の往復の宇宙旅行、その7年間の歩み」を演題に「あきらめない心」「チームワーク（和）の力」について講演いただきます。特別第2分科会では、和歌山大学の堀内秀雄先生から「地域コミュニケーションとPTA」のテーマ

で学校・家庭・地域で共に学び育て合う、仕組みを研究・討議していただきます。

近年加速度的に物や情報が溢れ、何もかも便利になり、人々の間には個人主義、合理主義がはびこり、面倒なこと、気を遣うことを極力避けるようになったと感じます。その代償として失いつつある大切なものが「人とのつながり」であります。

そのような状況が最近のいじめ問題や原発問題に大きな影響を与え、その内容が明らかになるにつれ、今、日本では「普通の考え方」「普通の行動」ができない人が増えているように感じています。何気ない普通の生活を維持するためには、プライドや勇気が必要になります。普通の考え・行動をできる人が率先して「人とのつながり」や「コミュニケーション能力」のスキルアップを図ることができれば、地

祝
辞

文部科学省 生涯学習政策局長

合田 隆 史



本日は、文部科学大臣平野博文より祝辞を預かって来ていますので代読させていただきます。

本日、第62回全国高等学校PTA連合会大会和歌山大会がここ和歌山県においてこのように盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。まずもって今春の一般社団法人への移行、誠におめでとうございまして。これまでの皆様の活動のご功績と入念な申請準備により手続きは大変円滑に進んだ旨伺っております。これまでのご功労に敬意を表するとともに一般社団法人としての新たなスタートにお慶びを申し上げます。

東大日本大震災からすでに1年5か月が経過しました。この間PTA関係者の皆様に子どもたち

のため多大なるご尽力をいただきましたことに心より御礼申し上げます。厳しい状況の中でも元気に学ぶ子どもたちの姿から子どもたちは社会の光であることを改めて確信しました。復興に全力を尽くすと共に未来を担う世代の育成に最大限の努力を傾けねばならないとの想いをより一層強くしたところで。文部科学省としても引き続き被災地における学校の施設設備の復旧や就学支援の充実、心のケア等に全力で取り組みたいと考えております。合わせて震災の教訓を踏まえて未来に向かうための復興教育を支援して参ります。高等学校の教育は、義務教育の成果をさらに発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養う大変重要なものである。

文部科学省では現在高等学校教育のあり方や高校と大学の接続の見直しについて検討を進めており、変化の激しい社会の中でしっかりと生きる力の育成に取り組んで参ります。

いじめが背景事情として認められる生徒の自殺事案が発生していることは大変遺憾なことです。このような痛ましい事案が二度と発生することのないようPTAの皆様のご協力をいただきながら、学校、教育委員会、国などの教育関係者が一丸となって取り組んで参ります。

全国高等学校PTA連合会ならびに各校PTAの皆さまにおかれましては、今後ともPTA活動のリーダーとして、また学校教育の良き理

解者として子どもたちの健全な育成のためにお力添えをいただきますようお願いいたします。

結びに、本日ご出席の皆さま方には、各都道府県等でPTA会員が一致協力して創意工夫に満ちたPTA活動を進められるよう改めてお願い申し上げます。このように全国高等学校PTA連合会の益々のご発展と本日ご参集の皆さま方の一層のご活躍を祈念申し上げます。本日、誠におめでとうございます。



域共育の始まりとなり、「市民性を高める教育」につながり、その循環が始まれば、その地域はすばらしいコミュニティを維持し続けます。

我々PTAは、子どもの健全な育成のため、地域・学校・保護者を応援することを中心に考え活動しています。原発事故時の何もコントロールできない状況や、住民を無視した発言、事故時の原発管理施設のビデオ記録の公開の在り方が確認された今、そのことに、絶望感を感じたのは私だけではないと思います。原発問題も我々PTAの大きな問題の一つであることを、認識すべきであると思います。

目標に向かって、猪突猛進し市民性・社会性に配慮できない競争社会がはびこる中、市民性が欠如した企業や経済団体の責任は大きいと認識する必要があります。我々は、政治活動はいたしません、社会の在り方、政治には常に関心をもち、注目し、子どもたちのことを一番に考えるとき、何がベストなのかを考えて、行動すべき

だと感じます。そのためにも、今日から始まる、和歌山大会で披露される、全国の先進的なPTA活動の事例を研究・討議され、各PTAに、活用できるアイデア・ヒントが見つければ、実行委員・スタッフ全員うれしく思います。

結びに本大会開催にあたり文部科学省はじめ、和歌山県、和歌山市、田辺市ならびに関係諸団体の皆さまに多大なるご支援を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表しますとともに、第62回全国高等学校PTA連合会大会和歌山大会の開会のごあいさつとさせていただきます。



高校生によるアトラクション

学校教育とPTA

～社会性を身に付け「生きる力」を育む教育とPTA活動～ 於：和歌山ビッグホエール

第一分科会

した。

北海道札幌あすかぜ高等学校PTA会長 原貴彦氏は、「学校教育の追い風となる接点づくり」と題して、保護者が自身自身の考え方の枠のみにこだわらず、より多くの情報を共有し、柔軟で大局的な見地から我子の教育に関わることが、学校教育の現場での追い風と

生徒が自ら学び・考え・課題解決に意欲的に取り組む態度や能力を養い、新しい社会づくりができる地域社会の一員として成長するために、その基礎となる「生きる力」を育成する学校づくりをめざし、PTAはどのような支援をすべきかについて研究協議を行いま

なると話されました。

東京都立板橋高等学校前PTA会長 内田敏恵氏は「PTAからの発信で学校経営が変わる生徒と先生と保護者の対話から未来が開けるPTA活動へ」と題して、生徒、先生、保護者のより良い関係づくりのために始めた「板橋シンポジウム」が、現在年5回開催されている。このことを含めたPTA活動は、生徒と先生と保護者の三位一体となる活動へと変化してきていると話されました。

京都府立嵯峨野高等学校前PTA会長 藪本万希子氏は「子どものよき理解者となるために親子で共に成長を目指すPTA活動」と題し、子どもと接する機会や、共通の話題がもてるようより多くの親に学校に来てもらえる取り組みを進めている。その中でも学級懇談会の出席率が高い。PTA活動を通じて、親も成長し三者の信頼関係が築ければ、子どもは自ずと「生きる力」を育んでくれると話されました。岡山県立倉敷工業高等

学校PTA副会長 清水美佐代氏は、「出会い・ふれあい・絆の輪」と題して、学校行事への参加や生徒会と一緒に取り組んでいるあいさつ運動、PTA新聞「かけはし」の発行などを通じて、生徒とのコミュニケーションを図り、学校や保護者の思いを共に共感し、絆を大切に成長して行きたいと発表されました。

最後に、和歌山大学名誉教授 市川純夫氏と和歌山県立桐蔭中学校・高等学校校長 宮下和己氏よりそれぞれの立場から助言をいただきました。



進路指導とPTA

～一人ひとりを大切にする進路指導とPTA活動～ 於：和歌山市民会館小ホール&市民ホール

第二分科会

した。

岩手県立遠野高等学校PTA会長 角田直樹氏は、「PTA主催事業」の目指すもの」と題して、文化祭「鍋城祭」において、PTA全役員の

高等学校卒業後の進路は多岐に渡るため、就職先・進学先のミスマッチにより短期間の離職や中途退学をする子どもが増加傾向にありま

つながりの中で企画される「PTA主催事業」は、高校生として「元氣」であって欲しい、「生きる力」を持ち続けて欲しいなど、子どもたちへのエールの気持ちを表したものであると話されました。

群馬県立藤岡工業高等学校PTA会長 人見孝夫氏は、「子どものキャリア意識を高めよう大切なのは学校と保護者が進路情報を共有すること」と題して、情報を共有するために、PTA総会時に保護者向けの進路フェスタの実施やPTA主体で保護者を対象としたキャリア教育セミナーを開催している。多くの親が学校に足を運んでもらい、家庭でも進路について親と子が向き合い、話し合っ

石川県立七尾東雲高等学校PTA会長 松江和成氏は、「本校の進路指導とPTA活動」と題して、3校の実業高校が統合され新規開校した9年目の進路状況、生徒の進路実現に重きを置き企業や大学に日帰り研修旅行

するなどのPTA活動について話されました。高知県立高知東工業高等学校PTA会長 中元ひとみ氏は、「面接官はPTA 進路実現に向けた模擬面接」と題して、PTA模擬面接は、生徒にとつて本番を目前に自分自身を再認識できる機会に、面接後の保護者と学校との意見交換は、次年度の取り組みに活かされ本校の非常に高い就職率維持に貢献していると発表されました。

最後に、和歌山大学教育学部教授 越野章史氏と和歌山県立古佐田丘中学校・高等学校校長 北浦健司氏よりそれぞれの立場から助言をいただきました。



生徒指導とPTA

～規範意識の確立と命の尊さを伝えるPTA活動～
於：体育センター和歌山ビッグウエーブ サブアリーナ

第三分科会

ばよいのかについて、研究協議を行いました。

秋田県立大館国際情報学院高等学校PTA会長 村岡昇氏は、「生徒指導から生徒支援へ」と題して、中高PTA、職員が一つとなり、約束を厳守させる生徒指導から生徒が自ら気づき律することのできる生徒支援へと変えたことで、保健室の

社会の変化や高度情報社会の進展により、子どもたちの問題行動等が多様化し、学校での対応が複雑化しています。

その中で、子どもたちの規範意識を育成するとともに「生まれてきてよかった」と感じる社会づくりを推進するためにPTAとしてどう関わればよいのかについて、研究協議を行いました。

利用減少など子どもたちに変化が見え始めていると話されました。

三重県立水産高等学校PTA顧問(前会長) 鶴丹谷正晴氏は、「生徒とのふれあい」と題して、未成年者喫煙防止キャンペーン、防災グッズが入ったサバCANの製造などふれあいや関わりを通してPTA活動における生徒指導が紹介され、注意すること・指導することだけが「生徒指導」ではなく、高校生とつながることでも自然に、高校生自身がそれぞれ自分で成長する、これも生徒指導だと思ふと話されました。

奈良市一条高等学校育友会会長 宮木健一氏は、「学びの中で得る規範意識 子ども達と共に」と題して、育友会活動の中で子ども達と共に活動し共に経験し共に感動することが大切と考え、子どもたちと同じメニューを食べる「一条ランチ昼食会」、同じ教室で授業を体験する「一日高校生体験」などの特徴あるPTA活動が報告され、なにげない日々の積み重ねが大きな一歩を生

み出すと話されました。

福岡県立三潴高等学校父母教師会副会長 中村留美氏は、「青少年の健全育成とPTA活動の取り組みについて チーム三潴の合い言葉をとoshite」と題して、学校、PTA、同窓会、地域が一丸となり、協力しながら取り組んでいる活動や、ただ保護者が地域へ参加する形だけではなく、地域行事と学校・子どもたちの間に立ち、準備の段階からバックアップし、関わりを持つていきたいと話されました。



家庭教育とPTA

～もう一度考えよう 家庭教育の役割とPTA活動～
於：武道・体育センター 和歌山ビッグウエーブ メインアリーナ

第四分科会

めに何ができるのか、何を教えるべきなのか研究協議を行いました。

栃木県立黒磯高等学校PTA会長 眞壁俊郎氏は、「思春期の子を持つ親の学びの実践」と題して、PTAの役割は学校を支援するとともに自分たちの学びの集団でもあることから「家庭教育に関する保護者学習会」を

高度情報化、核家族化、少子化等を背景として、社会全体で子育てや家庭教育を見守り

高まっています。今こそ、子育ての原点に立ち、豊かな人間性の育成や、家庭の中で親として子どもに基本的な生活習慣を身に付けさせるために

実施し親同士の交流や情報を共有する機会を設けていると報告され、学習会で気づいたことをまとめた「思春期の子を持つ親の心得20章」が参加者に配布されました。

富山県立砺波工業高等学校PTA会長 西島宏伸氏は、「家庭教育とPTA アンケートから見えてきたもの」と題して、社会生活を歩み始めるまでに保護者が教えられるであろう「人生の社会勉強」を促し、「社会の秩序を守り、社会に貢献する」意識を持たせるなど「親の思いを親として如何にして伝えていくのか」アンケート結果を踏まえPTAの具体的な取り組みを検討したいと話されました。

愛知県立一宮南高等学校PTA会長 春日井公成氏は、「PTAからの発信 家庭との絆づくりをめざして」と題して、いろいろな情報をPTA全会員に発信、共有し絆を強めるという趣旨からPTA自らが「考え、作り、発信する」広報誌「絆」の発行活動などを報告されました。

佐賀県立高志館高等学校

学校教育振興会前会長 今泉文明氏は、「夢の実現に向けて 学校との連携を通して」と題して、子どもの教育は、学校の歴史や地域性、家庭や子ども

の現状等をベースに、子どもの成長への共通の思いのもとになされるべきである、農業の専門高校である特徴を活かしたマラソン大会での「父ちゃんちゃんこ」の振る舞い、保護者向けの「パン作り・ガーデニング講習会」など楽しい取り組みを通して活動が報告されました。

最後に、社会福祉法人アトム共同福祉会理事長 しばさ共同保育園園長 市原悟子氏と和歌山県立みはま支援学校校長 東中啓吉氏よりそれぞれの立場から助言をいただきました。



防災教育とPTA

～自助・共助を育む防災教育の推進～

於：紀南文化会館 大ホール

特別第一分科会

から何を学ぶのか」と題し、関西大学理事・社会安全学部長・教授の河田恵昭氏より基調講演をいただきました。

防災教育のポイント
は、命の尊さと生きていくことの大切さを学ぶことである。災害がなぜ起こるのか、起きればどのような被害がでるのか、そして、被害が出ないた

大地震等の大規模災害に備え、社会全体の防災力向上が喫緊の課題となる中、災害に見舞われた時、自分自身を守りお互いに助け合っている力を育む防災教育を学校・地域・家庭がどう協力して取り組むかを学びました。はじめに、「学校教育は東日本大震災から何を学ぶのか」と題し、関西大学理事・社会安全学部長・教授の河田恵昭氏より基調講演をいただきました。

めにはどうすればよいのかのメカニズムを学び、自ら判断し、危険を回避する力をつけるなど、より安全安心を確実にすることが防災教育の目的となると話されました。

続いて、パネリスト5名の実践発表。和歌山県立神島高等学校元育友会会長 玉井克昌氏は、災害は忘れたころにやってくるならば、忘れないように、繰り返し学習することが大切であると話されました。和歌山県立田辺工業高等学校教諭の畠守彦氏は、防災リーダーの育成や地域との信頼関係を築き、災害時には、学校が地域に貢献できることを目指して、工業高校の特性を生かした防災教育を話されました。紀州梅の郷救助隊の尾崎剛通氏は、災害時には、公共の救助だけではなく民間の力が必要である。近い将来予想される南海地震に備え経験を積んで欲しいと、若い人たちと被災地に出向き活動していると話されました。和歌山県立熊野高等学校総合学科3年生 西本誉氏は、熊野川流域で浸水した民

家の泥の除去に行った時の体験から、自分がしなければならぬことを学んだと話されました。兵庫県立篠山東雲高等学校PTA会長 井関利明氏は、農業教育の特性を生かし、さらに、地域と連携し地域に貢献できる人材の育成を目的とした学校・PTA・自治会共催の防災避難訓練について話されました。その後「地域」をキーワードに、活発なパネルディスカッションが展開されました。

河田氏は、地域の高中・小のネットワークを地域も入れた組織として展開し、防災力を身に付ける防災教育を継続的に取り組むことが大事である。紀伊田辺から全国に情報発信していただきたいと纏められました。



地域コミュニティとPTA

～熟議「子どもも大人も、共に育ち、育て合うPTA活動」～

於：和歌山市民会館 大ホール

特別第二分科会

子どもたちも地域の一員として主体的に社会に参画できるように、地域ぐるみで子どもを育てることの大切さを議論するとともに、日本を襲った大地震や台風がもたらした「深い悲しみ」と、それを取り越える際に生まれた地域の「絆」や「人の温かさ」から学ぶべきことについて、各パネリストがそれぞれの立場から意見を述べ合い、会場とも一体となつて、子どもも大人も、共に育ち、育て合うPTA活動の在り方について熟議を行った。まず初めに、本分科会の講師・コーディネーターであります、和歌山大学理事・副学長・教育学学生支援機構長 堀内秀

雄氏から、高P連と地域の関わりの中で高校生をどのようにサポートし、育ち合っていくのかを考えたとい趣旨説明があり、5名の方の発表に耳を傾けフロアの皆さまも参加してのシンポジウムが進められました。

地域ぐるみで子どもを育てる大切さを高P連活動でどう生かしているかの視点から、まず、山口県立大津緑洋高等学校PTA代議員 末永明典氏、和歌山県立海南高等学校大成校舎大成会長 西田博昭氏、和歌山県立和歌山東高等学校校長 萩原勝則氏の事例発表がありました。

末永氏は、長門の子どもたちに必要な教育とはと題した「リアル熟議inながと」を地域・幼保・小・中・高のPTA・大学生など参加で実施。西田氏は、きのくに共育コミュニティに和歌山県内で唯一参加している高校としての取り組み。萩原氏は、地域に迷惑をかけることの多かった生徒が地域貢献できるようなった取り組みについて、それぞれ発表がありました。



次に、震災や水害の中で高校生をもつ親が関わった活動として、宮城県志津川高等学校第2学年委員長 佐藤信一氏からは、東日本大震災で被災されながらも被災地の写真を撮り続け子どもたちが頑張っている姿を写真で、また、学生ボランティアバス実行員会代表 村田範裕氏からは、被災地に高校生を連れて行ったボランティアの報告がありました。

今後の高P連の活動として、高校生が命の大切さを語り継ぐ活動のバックアップや、地域と共に何ができるかを考えていきたいと話されました。

最後に堀内氏は、未来を子どもにバトンタッチしていけるよう、じっくり議論できる高P連を作って行つて欲しいと話されました。

大会宣言

「和をもって響き合え！～つれもて広げる 共育の輪～」をテーマに、伝統と癒しの地、紀の国和歌山において、全国各地から多くの会員が集い、第62回全国高等学校PTA連合会大会和歌山大会が開催され、大きな成果を収めました。

2011年は、未曾有の災害に日本各地が悲しみにふるえた年でありました。東日本大震災とそれに伴う大津波と原発事故、また、当県和歌山を含む紀伊半島を襲った台風12号の豪雨により甚大な被害を受けました。2012年半ばをむかえた今日、なお厳しい生活を強いられている方々がたくさんおられ、一日も早い復興が望まれております。

そうした中、私たちは、いのちの尊さ、人と人のつながり、絆、支え合うことの大切さなどを再認識するとともに、次代を担う子どもたちの「現在」が「未来」が輝く「応援団」としての決意を新たにしました。

本大会では、子どもたちが自立した若者へ成長していくうえで必要な、「豊かな心」や「社会性」などを育む社会の実現に向け、PTAの果たす役割や活動の在り方について熱心に討議がなされました。

ここに大会の成果を踏まえ、この国の将来を託す子どもたちがたくましく、大きく成長していくことを願うとともに、PTA活動のより一層の活性化と充実発展を誓い、私たちは以下のとおり宣言します。

記

- 一 近年、社会の変化や高度情報化社会の進展により、子どもたちの規範意識やマナー・モラルの低下、コミュニケーション能力の未成熟さ、耐性・道徳性の脆弱さなどが指摘される中、私たち大人が手本となり、子どもたちの規範意識を育成するとともに「生まれてきてよかった」と感じる社会づくりに努める。
- 一 近年の厳しい経済情勢の中で、高校生の中途退学や卒業後就職し早期離職をする傾向が高まっている。未来を担う子どもたちが、進路を決めるにあたり、自分の個性や適性等を十分に踏まえ、将来への夢・希望・目標の実現に向けて努力できるよう支援に努める。
- 一 情報化、核家族化、少子化等を背景に、地域での人と人のつながりが希薄化するなど、子育て家庭を支える地域環境が変化している中、地域ぐるみでの子育てや家庭教育を見守り支え合える環境づくりの重要性が高まっている。そうした中、子育ての原点に立ち帰ることで、豊かな人間性を育成し、基本的生活習慣を確立できるよう支援に努める。
- 一 今日、物質的な豊かさや便利さを追う社会の中で、行き過ぎた個人主義、格差社会が進行してきていると言われる中、私たちは子どもたちを取り巻く環境を心の通じ合う温かいものにしたいと願うとともに、学校、家庭、地域が「つながり」を実感できる社会をめざし、「共に育ち、育て合う」を合い言葉に子どもたちの健全育成に努め、魅力あるPTA活動の推進に努める。

第62回全国高等学校PTA連合会大会和歌山大会において宣言する。

平成24年8月24日

一般社団法人 全国高等学校PTA連合会

楽しい、元気がでる！そして、ためになる。
高校生新聞



高校生スポーツ



高校生新聞・高校生スポーツは、全国の高校生の活躍、勉強法・健康管理のアドバイス、進路情報など、高校生の生きる力と知恵をはぐくむ情報が満載です。全国約4,000校の高等学校の生徒に愛読されているほか、ご家庭でもご購入いただけます。取材のご希望は弊社編集部までご連絡ください。

▼ ホームページでも高校生のニュースを発信！

高校生新聞

検索



SP 株式会社 スクールパートナーズ

高校生新聞社

<http://www.koukouseishinbun.jp/>

おかげさまで
高校生新聞
創刊20周年
200号

本社：〒194-0022 東京都町田市森野1-34-10
TEL.042-725-1155 henshu@koukousei-sinbun.co.jp
西日本支社：〒552-0013 大阪府大阪市港区福崎3-1-148
北海道支社：〒060-0807 北海道札幌市北区北七条西4-8-3

●1993年10月創刊 ●全国4,000校の高等学校で愛読
●タブロイド判／平均24ページ ●毎月10日発行



らにの便り ここにあり vol.17

ひたすらに頑張る子どもたち。
をもって導く先生たち、
Aの仲間の姿をお伝えします。

北海道立札幌篠路高等学校

校訓「創造 開拓 希望」

良き伝統と文化を新たな学校へ

【学校概要】



本校は生徒急増期の昭和61年に地域住民の熱心な誘致活動によって誕生した札幌市の北部に所在する高校です。現在の生徒数は約870名で、道内の公立高校の中では比較的大きな規模の学校です。

【健やかな心身】

本校の特徴としては、部活動への加入率が毎年高いところです。約80%という加入率は道内トップクラスの数値であり、生徒達は部活動を通じて心身の健やかな成長を見せています。そのため、生徒達の表情は明るく、気持ちの良い笑顔での挨拶は、来校する方々から高い評価を得ています。また、本校は身だしなみ

についての厳しい生活指導が伝統となっていて、入学直後は戸惑いを感じていた生徒達も次第に慣れ、落ち着いた環境の中で勉強に励んでいます。服装の乱れは心の乱れに繋がると言われるが、本校の非行件数が極めて少ないのは、このような教育指導の賜と感じます。

【篠路祭】

本校の行事の中で一番の盛り上がりを見せるのは、毎年7月に開催される学校祭「篠路祭」です。ホームルーム対抗歌合戦では、クラス一丸となったパフォーマンスが見られ、会場は熱気一杯となります。後夜祭で行われる打ち上げ花



▶熱気あふれる篠路祭

火とフォークダンスは、開校時からの伝統行事となっていて、男子生徒と女子生徒が少し照れ臭い表情を浮かべながら、手を取り合ってフォークダンスを踊る姿は見ていてとても微笑ましいものです。

【盛んな部活動】



▶野球部の勝利を信じて

本校では現在、体育系18、文化系13の部と4つの外局が存在しています。これらの部局は全国大会に出場する機会も多く、弓道部は今年の10月に開催された岐阜国体の少年女子の部で4位という成績を残しています。その他にアーチェリー部、陸上部、空手道部の実力が高く、

全国大会出場校の常連となっています。また、本校では野球部が勝ち進んだ際に全校応援を行っており、絆の強さを感じる応援ぶりを見せています。

【明るく楽しいPTA活動】

本校PTAの主な活動内容としては、学校祭でのバザー（焼き鳥、マラソン大会での給水、大学・専門学校等への視察研修、学年単位での懇親会などがあります。委員会は1学年、2学年、3学年、広報、研修、生活という6つの委員会を構成されていて、委員長を中心とした熱心な活動が



▶マラソン大会での給水

毎年展開されています。PTA活動は明るく楽しい雰囲気の中で行われており、チームワークの良さが感じられます。



▶篠路祭での焼き鳥

【「札幌英藍高校」から 「札幌篠路高校」へ】

北海道の公立高等学校配置計画で生徒急増期に新設された高校は統合対象となり、本校が該当となりました。本校から約3km離れた場所に位置する札幌拓北高校と統合になり、平成25年4月から本校の校舎を利用して札幌英藍高校という学校に生まれ変わります。2つの高校の良き伝統と文化を融合させ、新たな学校への継承に向け現在取り組んでいるところです。

神奈川県立大和東高等学校

「人としての感性を磨く“和”の学校」

～人の“和”を広げる活動に取り組む～

「青春白書全国か
一輝く姿がこ未来を見つめ、夢を追い求め、
その子どもたちを熱意
そしてPT

【学校概要】

本校は、神奈川の県立高校100校計画の中で、昭和56年に開校した全日制普通科高校です。当初、仮設校舎で1学年4学級がスタートし、その後、昭和58年に境川が近くを流れる現在の地に本校舎が完成して移転。その後、8学級、12学級と時代の変化とともに生徒数が増え続けました。30年を経た現在は、1学年7学級となり、瀬谷養護学校の分教室も併設されています。

これまでの卒業生は9500名を越え、社会の様々な分野で活躍しています。

そのような中、大和の「和」、平和の「和」、調和の「和」の三つの「和」が織りなす「和」の学校をキーワードに、地域に根ざし、人と人とのつながりの重要性を認識した学校づくりを行っています。

【箏曲部】

箏曲部は現在6名の少人数ながら、県大会での上位入賞を目標に掲げ、厳しい練習の日々を送っています。先輩が後輩の

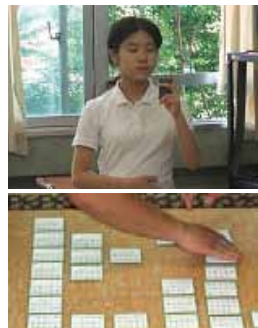


躍を誓う貴重な場となっています。また、尺八演奏会への賛助

出演など、校外の活動にも力を入れています。演奏会をとおして、一般の方にも和楽器の美しい音色を味わってもらいたい、という思いは、日々の活動に精を出す原動力となつていくようです。箏曲に魅了された部員の多くが卒業後も琴に親しみ、中にはプロになった先輩もいます。様々な人々とのふれ合いを通じて、部員たちは成長し続けます。

【かるた部】

大和東高校かるた部は、『人との繋がりを大切に！』と『楽しく！』をモットーに、毎週3日間限られた時間内で活動を行っています。現在部員は5人と少なく、かるたを始めたきっかけも人ぞ



れぞれですが、部員同士の間はともよいです。また、複数のOBやOG達が後輩の面倒を見るために、積極的に学校へ足を運んでくれています。その中には全国高等学校総合文化祭の神奈川県選抜選手に選ばれたOBもいます。今年は2年生の白竹八尋君が、富山県で行われたその全高総文祭の神奈川県選抜選手に選ばれ、神奈川県代表メンバーの一人として活躍しました。その白竹君に

全国大会の感想を聞くと「県代表選手ということが緊張はしましたが、対戦のときは落ち着いて自分のかるたを取ることができました。また、県代表の他の人たちと協力して取ることができたのでよい思い出になりました。」と語ってくれました。かるた部の今後の目標は、近江神宮の団体戦に県代表として出場すること、その目標に向かって現在頑張っています。

【PTA活動】

私たちは「ひと同士のつながりと和を大事にしたい」という思いから、保護者が自分たちの

「持っている力」を生かして、生徒たちと「対話・交流」を通じて「生活面」「学習面」「進路面」でかわっていくことによつて、保護者・生徒・教職員の連携を深めてゆき、PTA活動のこれまで以上の活性化を図りたいと思っています。

この方針のもと、2年前からさまざまな新しい試みを行っています。保護者・教員・生徒と一緒に校内をキレイにする「クリーン・チャレンジ」、近隣の施設へのお手伝い、大学と連携した「キャリア研修」、保護者・教員での意見交換会、保護者・生徒会との話し合いなどにより楽しい中にも真剣な一体感が生まれています。



第1回全国会長・事務局長研修会報告

昨年度まで「会長事務局長会議」という名称で開催してまいりましたが、本年度から研修会として位置づけ9月23日、京都市内において開催しました。

今回は、高校生の間に広がりつつあるスマートフォンについて、千葉大学教授藤川大輔氏に「青少年のスマートフォン利用について」と題して講演をいただきました。

主な内容は①スマートフォンとこれまでの携帯—ここが違う②スマートフォンの主な種類③携帯電話の普及によって発生した問題④ネット書き込みによる炎上事件の例⑤出会い系サイト及びコミュニティサイトに起因する被害児童生徒数⑥スマートフォン個人の情報収集をめぐる⑦ソーシャルゲームと射幸性

など、保護者として身につけたい知識と、注意すべき事柄について、わかりやすい解説を交えてのお話でした。

特に、最近になって高額課金の事例も増えておりますので、アンドロイド端末を利用する場合は通信会社の料金代行徴収サービスが利用できることから、有料コンテンツ利用禁止または上限設定を行っておくとい。また、プリペイドカードの管理をすることで高額課金を防ぐことができるなどの助言をいただきました。

当日は前日開催された各委員会報告及び全国大会和歌山大会報告、賠償責任補償制度などの報告が行われました。
(文責事務局)

各委員会報告

健全育成委員会

委員長 橋本 博文
第2回委員会において協議された事項は次の通りです。

①『バイクの3ない運動』については、埼玉大会での宣言文の精神を踏襲しつつ『自転車、バイク、歩行者のマナーアップ運動』を推進していきます。子どもたちが被害者にならない、加害者にさせない、子どもたちの命を守る取り組みを行います。事故防止のために、各都道府県市高P連に配られたDVDデータを活用し各単Pに普及を図ります。

②近年、各学校で薬物乱用防止教育が行われていますが、保護者対象の啓発活動は本連合会が作成するパンフレット以外にはほとんど行われておりません。本年度版も最新のデータに更新して、来年度入学する保護者にお渡しするために、既に2回の編集会議を行いました。

③スマートフォンに代表される進化したタブレットを保持する高校生はすでに50%を超えていることから、関係機関と連携しながら正しい情報を共有化し、子供たちを守ります。

④『全国高校生の生活・意識調査』は本年度から自主事業として計画し、京都大学大学院の木原雅子准教授を委員長とする協力者委員会の協力を得て事業を推進します。会議では来年度実施に向けて調査内容を協議しました。

進路対策委員会

委員長 毛利 一朗
第2回委員会において、「新規高等学校卒業予定者に対する雇用確保について」文案を検討、また、これまで就労支援に効果のあった「キャリアサポート事業」継続要請について報告しました。

引き続き、リクルート進学総研所長、小林浩氏を講師に迎え、大学の秋入学の動向を、議論の中心になつている東京大学を例に話し頂きました。大学も競争の時代になり、自己改革の中で制度の変更を検討している状況をお聞きし、秋入学の動きが進行しているのを感じましたが、まだまだ流動的な中身で、議論するには情報が不足しており、さらに調査・研究を続けていくことになりました。

また、昨年度行われた、「高校生と保護者の進路

に関する意識調査」の結果を改めて解説して頂き、広報活動のあり方を含め、次回調査に向けての議論を行いました。

調査広報委員会

委員長 関根 英樹
第2回委員会では①会報73号の総括②74号の企画、発行③数字表記④ホームページ(HP)の順序確認⑤次年度の事業計画—などについて検討しました。

①シリーズ青春白書について、年3回の発行回数を考え、話題性も考慮して、その年の特徴ある学校を取りあげてもらうよう依頼する。左右対称の紙面構成を修正する。などの意見が出ました。

②最終面に興味を引く話題を置くこととし、シリーズ視点の新たな企画として、世界に羽ばたく高校生の活躍とその保護者にスポットをあてた記事を掲載することにしました。

③数字を今後は基本的に洋数字で統一することにしました。

④順序確認と共に、HPのリニューアルを早急に行うことを申し合わせました。

⑤全国大会での広報紙展示を開催県にお願いする

ことを確認しました。より良い広報紙発行のために皆さまのご協力をお願い致します。

研修委員会

委員長 金井 修
第3回研修委員会において協議された事項は以下の通りです。

①全国大会和歌山大会を振り返って：和歌山大会実行委員長所感、研修委員のレポートを発表し大会を検証した。

②全国大会開催ガイドライン—について：現在の大会運営に即した修正項目を確認した。

③25年度山口大会の取り組み状況：進捗状況の報告をしていただき、新規に作成したWEBシステムの提案があった。

④福井大会特別分科会テーマと地区活動との関係について：進捗状況の報告をしていた。

⑤25年度地区大会等での取組状況：各地区での、開催日程、開催場所、開催メインテーマを確認した。

⑥岩手大会以降の開催地(関東地区)の確認：千葉県と茨城県が候補に上がっているが、9月時点では確定しておらず、2月の理事会までに確定させる事となった。

シリーズ 視点 新企画

世界に羽ばたけ！
★輝く高校生！

お父さん お母さんへインタビュー

桃田 信弘さん・美千代さん

バドミントンの世界ジュニア選手権男子シングルスで、日本人初制覇の偉業を果たした福島県立富岡高校三年桃田賢斗君(18)。中学から四国・香川県三豊市の実家を離れ、東北・福島県富岡町の寮に住みながらバドミントンをつけた。国内から世界で注目される存在となっていく中で、東日本大震災が発生する。東京電力福島第一原発の事故で避難を余儀なくされ、一時は競技の継続さえ危ぶまれた。遠く離れた地から賢斗君を見守る父信弘さん(48)と母美千代さん(47)。信弘さんに息子への思いを聞いた。

(聞き手・調査広報委員長 関根英樹)・12面に関連記事

世界一になった瞬間を目にした感想は。

信弘さん 中、高6年間の集大成として臨んだ試合だった。これまでのことが頭を駆けめぐり、涙が止まらなくなった。震災後も支え続けてくれた皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

賢斗君とバドミントンとの出会いは。

信弘さん 3学年上の姉が近くの学校の体育館のバドミントン教室に通っていたのがきっかけだった。見ているうちに自らもやり始めた。私たち夫婦はまったく経験がなかった。

なぜ、福島県の富岡中に入ったのか

信弘さん 筋が良かったのか、見る間に上手に

なった。たまたま、香川県で小学生の全国大会

があり、出場したことで、より競技がおもしろくなったようだ。中学では野球をするはずだったが、全国のライバルと出会ったことで、負けず嫌いの正確もあつたのか、自ら富岡に行くと言い出した。子供の気持ちを尊重して送り出した。

心配はなかったか。

信弘さん 中学の入学式に出た帰り、妻と二人で泣いてしまった。ただ、学校の環境はじめ監督やコーチ、周囲の人たちが素晴らしく、次第に入学させて良かったと思うようになった。

原発事故が起きてしまったが。

信弘さん 信じられなかった。賢斗はインドネシアに遠征していて、数日後に飛行機で日本に戻り、香川県の自宅に帰ってきた。富岡高校のサテライト高校の一つが福島県の猪苗代町に設けられることになった。周囲で反対する者もいたが、賢斗は世界を狙うダブルスを組んでいたこともあり、チームメイトのためにも



桃田家族写真(左から) 信弘さん、賢斗君、美千代さん

戻ると言い出した。猪苗代まで送った帰り、親として、この選択で良かったのか悩み、再び妻と泣いた。

どのような子供だった。

信弘さん 一歳になる頃には立って歩き回る活発な子だった。何かスポーツをしてほしいとの思いは妻と共通だった。やりたいことをさせようと思っていた。賢斗の活躍と共に私も妻もバドミントンが大好きになり、お手伝いもするようになっていた。

今の気持ちは。

信弘さん ここまで賢斗を支えて頂いた多くの皆さんに感謝している。卒業後は社会人チームに入り、本格的にオリンピックを目指すそうなので、一生懸命応援してあげたい。

(社)全国高等学校PTA連合会 後援
AIU 高校生国際交流プログラム
(参加費無料)
国際交流を超える人間交流

「育てたいのは、子どもたちの未来。」
AIU CHARTIS

AIU 高校生国際交流プログラム事務局
Tel 03-5819-8288
Email hsd@highschooldiplomats.org
http://www.highschooldiplomats.org/

MS&AD 三井住友海上

さあ来い! リスク。

リスクとトータルに戦う
総合保険ブランド[GK]

三井住友海上火災保険株式会社
〒104-8252
東京都中央区新川 2-27-2
www.ms-ins.com

TOKIO MARINE NICHIDO

地球の未来にできること。
マングローブ「海の森」づくりは、
その答えのひとつです。

東京海上日動火災保険株式会社
東京都千代田区丸の内1-2-1
〒100-8050
http://www.tokiomarine-nichido.co.jp/

日本の保険は、
ジャパンが変える。

損保ジャパン

株式会社 損害保険ジャパン
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
TEL 03(3349)3111
ホームページアドレス http://www.sompo-japan.co.jp



◀世界ジュニア選手権
決勝で好プレーを見
せる桃田君

▼優勝を決め、ガッツ
ポーズをする桃田君



世界に羽ばたけ！ 輝く高校生！



写真提供：福島民報社

世 界ジュニア選手権決勝は11月3日、千葉県千葉市で行われた。7月のアジアユース選手権を制して臨んだ桃田賢斗君は決勝で中国の薛松選手と対戦する。セットカウント1-1で迎えた最終第3ゲーム。一次は1-7と6点のリードを許しながら、驚異的な粘りで逆転し世界

桃田（富岡高）Jr世界一

バドミントン日本勢で初

一を勝ち取った。「いろいろな人に支えてもらってここまでできた。目標は4年後のオリンピック」と今後の活躍を誓う。応援席で見守ってくれた父親の信弘さんに対しては、「両親とも」これはだめとか言わないで、自分の選んだ道を応援してくれている。本当に感謝しています」との思いを口にした。

第 1回目は、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故で翻弄されながらも、バドミントン世界ジュニア選手権（18歳以下）男子シングルスで日本人初の金メダルを獲得した福島県立富岡高校3年桃田賢斗君（18）とご両親の桃田信弘さん（48）、美千代さん（47）です。（11面に関連記事）

【桃田賢斗（ももた・けんと）】香川県三豊市出身。三豊市立吉津小学校卒業後、福島県で始まった連携型中高一貫教育の双葉地区教育構想2期生として富岡町立富岡一中に入学。福島県立富岡高校に進む。高校1年生の時、震災と原発事故で富岡高校での授業ができなくなる。富岡高校は事故が起きた原発から約10キロの距離にあった。バド

ミントンのメンバーは約80キロ離れた福島県猪苗代町の猪苗代高校の一部を間借りし、授業を再開。練習場所が一定しないという環境の中で、民宿で合宿生活しながら主将として部員とともに活動を続けた。バドミン

トンは小学2年生から始め、6年生の時に全国小学生選手権優勝。全国中学校バドミントン大会とインターハイも制している。4年後のブラジル・リオデジャネイロ五輪の強化選手に高校生で唯一選ばれている。

平成24年はオリンピックイヤーでした。世界のひのき舞台で高校生も大活躍しました。スポーツだけでなく芸術、学業さまざまな分野で世界に羽ばたく高校生がいます。輝く高校生。その活躍と保護者の思いを紹介するコーナーを、シリーズ視点の中の新たな企画として始めます。（調査広報委員会）

会長の

つぶやき



8月の和歌山大会の基調講演後、講師控室の前に一人の高校生が立ちすくんでいた。あこがれの川口淳一郎先生にどうしても質問したいことがあるという▼スタッフが尋ねると、快く招き入れてくれた。講演の時と変わらぬにこやかな表情で丁寧に答えてくれる。高校生は必死にメモを取りながら、宇宙への思いを口にした▼東京の事務局に、一通の手紙が届く。あの時の高校生からだ。貴重な機会を与えてもらったお礼がつづられている。「この経験を私の人生に必ず生かしていきます」▼感激に顔を紅潮させた姿が目の前に浮かぶ。「和を持って響き合え！つれもて広げる 共育の輪」。ちいさなきっかけとそれぞれの思いやりが、教育の大きな輪となって広がっていく。